

[論文]

生成文法の持続可能性について*

赤 楚 治 之

名古屋学院大学外国語学部

要 旨

半世紀以上にわたり理論言語学をリードしてきた生成文法では、その実験的最先端である最小主義 (minimalist) プログラムが、言語進化からの制約を取り入れたことから、かつてのUGを、第1要因 (遺伝的特質) と第3要因 (自然科学における法則など) とに分け、近年は後者の解明を中心に研究を押し進めてきている。これにより、UGの捉え方が、豊かなUGから最小限のUGへと変化した。これは、大胆かつ知的好奇心をそそるステップに見える一方で、その展開を見ていると、限定的かつ、拡がりのないデータ・経験的事実を扱う研究が目につき、理論進展のダイナミックさが体感しにくい状況になっているようにも思える。このような中で、生成文法の企てを率いてきた知の巨人Chomskyが95歳という高齢となる現在、生成文法のこれからを考える必要があるのは確かであろう。本研究では、生成文法が採る3つの可能性 ((1) 理論の実証的研究 (=領域横断的な協働), (2) 独自の理論研究: 言語の生物・物理学的基盤の提案, (3) 第3のアプローチ: 言語事実の整合性を重視する研究) を挙げた後、3番目に含まれるものとして生成文法と認知言語学の協働可能性について触れる。

キーワード: 生成文法, ミニマリスト, UG, 持続可能性

On the sustainability of generative grammar

Naoyuki AKASO

Faculty of Foreign Studies
Nagoya Gakuin University

1. はじめに

生成文法はNoam Chomskyが、1950年代中頃、その着想に至ったと言われているが、1957年の*Syntactic Structures*の出版を持ってその始まりされるのが一般的である。いずれにせよ、70年近くの歴史を持つこの文法理論の進展については、Newmeyer (1980, 1986)などで語られてきた。半世紀以上にわたる歴史のなかで、周知の通り、Chomskyはたびたび理論修正を繰り返してきた。修正という言葉が適切でないくらい、大幅な理論的改革も何度か経験している。そのような理論変遷のなかで、Chomskyから袂を分かった研究者たちには、それぞれが信じる前提や視点に沿って、独自の理論を開発した者もいるが、その中でも、1965年の標準理論 (*Aspects of the Theory of Syntax*)における意味部門と統語部門の在り方に関して、Chomskyから離れた研究者たちが、後年、認知言語学と呼ばれるようになるアプローチをそれぞれが独自に開発してきたことはよく知られている。およそ70年にわたり言語学(理論言語学)をリードしてきた生成文法であるが、生成文法を着想しその後の理論構築・進展を「生成文法の企て」の中心として率いてきたChomskyが95歳という高齢に達している現在、この理論の今後について関心を寄せる研究者が少なからずいることは間違いないだろう。そこで、この小論は、論者の限られた知見という制約のもとで、この分野の今後について考えてみようとする試案である。

2. 生成文法の現在地

まずは、現時点において生成文法を取り巻く環境を概観することから始めたい。

第一に、挙げられるのが、主流派生成統語論 (mainstream generative grammar: Culicover & Jackendoff (2005) の用語) に対する関心の薄れである。生物言語学 (biolinguistics) を標榜する現在の主流派生成文法については、かつてこの文法理論が誇っていたような「輝き=引力 (=魅力)」が感じられなくなっているのではないかという懸念がある。2020年11月に行われた日本言語学会161回大会のシンポジウム (「理論言語学を科学哲学する」) でも、(生成文法を含む理論言語学全般に対してだが)、危機感を表明しているし、また学際的アプローチによって進展を見せている(本流の)生物言語学の研究においては、Chomskyらの立場は非主流派であるという指摘がある¹⁾。

さらに(これは日本だけに限った話であるのかどうか、浅学の論者には正しく判断できないが)日本においては、生成文法に対峙する認知言語学の勢いに押されている感がある。『認知言語学大事典』(2019年:朝倉書店)の出版や、『認知日本語学講座』(全7巻)(2019年~:くろしお出版)、等、多くの関係図書が出版されているのに対し、生成文法関係の出版はそれほどなされていないという印象がある。認知言語学関係の出版物の中には、山梨(2021)『言語学と科学革命—認知言語学への展開』(ひつじ書房)のように、生成文法に対する批判を展開したり、Ibbotson & Tomasello (2016)の*Scientific American*に載った“Evidence Rebutts Chomsky’s Theory of Language Learning”が『日経サイエンス』(2017年5月)に翻訳記事(「チョムスキーを超えて:

普遍文法は存在しない)として掲載されたりしている。

さらに、そのような外的な環境以上に、生成文法にとって大きな問題となるのが、Generative Enterpriseを率いてきた知の巨人であるNoam Chomsky(1928年生まれ、現在95歳)のなき時代が現実のものとなることである。もちろん、生成文法はChomsky一人で理論を進展させてきたものではないが、理論展開における要所要所の局面ではChomskyという一世紀に出るか出ないかの比類なき知性関わってきたのは明らかである。その信頼おける「巨人」がいなくなる時代が近づいている。

このような状況に置かれている生成文法は今後どうなっているのか、少なからずの研究者たちは関心を寄せているはずである。本稿では、この点について論じることになる。生成文法の持続可能性(sustainability)、つまり、生成文法は生き延びることができるのかどうかという問題である。まずは、切り口として、生成文法とは切り離せないuniversal grammar(UG)を軸にしながら論を進めていきたい。UGの捉え方の変遷から、この理論の向かう先を押さえた上で、持続可能性のためのいくつか方向性を考えてみることになる。

3. Universal Grammar

先述の通り、生成文法は1950年代にNoam Chomskyが打ち出した文法理論であるが、一般的には最初の著作である*Syntactic Structures*(1957)が出版された1957年がその始まりとされている。当時は形式的な面からの文法理論の構築に力点を置いた研究が主体であったが、1960年代になって、体系化されたモデルが提唱された。いわゆる標準理論(standard theory)として後に知られるものである。その第一章のなかで、Chomskyはuniversal grammarを取り上げている。universal grammar自体の考え方は、18世紀の、思弁的な文法の中に見られるものである。もちろん、単なる古い考え方そのものの復活ではなく、当時の研究レベルに落とし込んだ意味でのrevivalであるのは言うまでもない。その裏側にあったのが、言語獲得の問題と呼ばれる現代言語学に突き付けられた大きな「壁」であった。つまり、子供は(脳に障害がない限り)母語を獲得するが、それには次のような特徴が見られる。(1)4,5年という短い期間で母語の文法をマスターする。(2)子供の周りの発話データは我々が学校で外国語を習う時に使用する教科書のような完全な文ではない。(3)「生まれ」でなく育った環境の言語の文法を獲得する。(4)母語獲得には年齢的な制限(臨界期)がある。このような問題に解を与えることのできる文法理論でないと理論としては不完全なものになるというのがChomskyの言い分であった。これは後年、Platoの問題と名付けられるもので、貧しいインプットにもかかわらず、結果として得られる言語知識の豊かさはどこからくるのかという問いである。この問いに対する答えとしてChomskyが提唱したのがUniversal Grammarという考え方であった。

この18世紀の思弁文法に見られるuniversal grammarの概念を20世紀の文脈に呼び戻したのがChomsky(1965)の*Aspects of the Theory of Syntax*の第一章である。しかしながら、当時の生成文法では、universal grammarに迫るだけの科学的な蓄積が十分でなかったことから、その当時は、

言語理論が向かうべき先という漠然としたものであった。当時の生成文法は、個別言語（英語）の規則の研究並びに一次言語資料から出来上がる「可能な文法（統語部門）」の数を絞りこむための規則への制限が研究の中心であった。しかしながら、個別文法の規則を扱っていても、普遍文法に近づくことができないことから、規則の裏で働く一般的特性の研究を追い求める研究（この時期の研究における金字塔がJ. ロスの博士論文 *Constraints on Variables in Syntax* (1967) である。）へと進み、それが1970年代に入ってさらに精錬されていき、1980年代の初めに、個別言語の文法規則が示す諸特性の中から普遍性を持つ部分の抽出することで、はじめて普遍文法を目指したモデルが提案されるに至った。それが後年「原理とパラメータ（Principles & Parameters: PP理論）」（当時はGovernment and Binding Theory (GB理論) と呼ばれていた）と呼ばれるもので、おぼろげにUGの仮の姿が見えてきたという感覚であった。

その後、このモデルに基づいた興味深い研究が蓄積され、同時に理論が深化していった。このことにより、英語以外の言語でも検証が行われ、多くの興味深いデータの蓄積が見られた。その意味においてGB理論の道具立てを用いた、言語の「記述」が豊かになった時期である。一方で、発掘されたデータが多くなり、研究の進展が進むほど、UGの内容が豊かな（あるいは込み入った）ものになっていった。これはエンジニアリングの問題と呼ばれるもので、インプットとアウトプットが決まっている場合、それらを結び付けるブラックボックスのなかを組み立てる際には、様々な可能性があり、絞ることができなくなるという問題である。それに伴い、様々な技術的修正が試されたが、Chomskyはそれまでの理論前提を変更するという大胆な方向に歩みを進めた。これまで採用してきた重要な仮説（D構造やLFなど）を大胆にも捨て、よりシンプルな形でsyntaxを再構築していった。それが90年代の極小主義（ミニマリスト）プログラムである。Chomskyはこの「プログラム（研究方策）」であることを強調する。つまり、PP理論に基づきながらも、今後は一度このような考え方によって理論を組み立てていくという可能性を追求したものである。

ミニマリストプログラムでは、syntaxは二つの部門（音の部門と意味の部門）から読み解かれなければならないとするlegibility条件が課されており、余分な「道具」は出来る限り排除するという作業仮説を持つ。その結果、*Aspects*の時代から受け継がれてきたD構造やS構造、句構造と変換規則の区別、syntax部門と意味部門を結ぶインターフェースとしてのLFの存在など、を捨て去ることになった。その結果、UGは進化の問題をクリアすることになる。進化の問題というのは、PP時代に提案されたような豊かなUGを人間が生得的に有するということになれば、ヒトはいつそのような複雑なUGの「知識」を獲得したのかという問題が立ちだかることになる。これまでの知見では、ヒトが言葉を操ることができるようになったのは10～15万年前と言われている。その時まで、「豊かなUG」がどう生じたかを説明するのは極めて困難である。生成文法は久しくこの言語の進化の問題を棚上げしてきた。ところが1990年代に入り、それを無視できない状況になってきた。Chomskyは久しくこの問題については「突然変異説」を主張してきたが、これに対して多くの研究者が疑問を呈した。興味深いのは、当時MITの教授であったSteven Pinkerが教え子のBloomとともに、この問題にチャレンジした論文を書き、MIT

でそれについてのシンポジウムが行われたことである。当日のコメンテーターとして、GouldとChomskyが予定されていたが、当日、Chomskyは体調の理由で欠席となり、代わりにMassim Piatelli-Palmariniがコメンテーターとなった。Gouldも長距離フライトによる帰国の疲れか、刺激的なやり取りはなかったとPinkerは述べている²⁾。

この言語進化の問題（後年Darwinの問題と称される）に対するミニマリストの立場が明らかになるのがChomsky（2004）の論考“Beyond explanatory adequacy”である。そこでは、説明項としてのUGから被説明項としてのUGへとパラダイムシフトが主張されている。

このようなUGの変遷を受けてきた結果、現在のミニマリストが採る研究戦略は言語を次の3つの要因から成ると捉えることになった。

- (1) 第1要因：遺伝的資質（=UG）
- 第2要因：経験 データ
- 第3要因：言語に特化されない諸原理や法則

第1要因はこれまでのUGにあたるもので、言語に特化された生得的・遺伝的資質のことである。現在では、この第1要因にあたるのは、merge（併合）の操作だけであると考えられている。さらにはmergeのようなシンプルな操作は言語のみならず他の認知領域や諸活動でも見られることから、UGはないことになるかもしれないという指摘もある。これについては今後の研究を待たなければならない。第2要因は個別言語（の文法）の構築に必要なインプットで、これがないと第1要因も第3要因も機能しない。第3要因は言語に特化されない普遍的な制約である。具体的には、自然法則、物理の法則、効率的計算の原理などや、言語習得や他の領域で用いられるデータ処理の諸原理など（例：処理の速度と方法、入力統計的特性、記憶制約）が考えられる。これらはこれまでは第1要因の生得的・遺伝的資質と区別されずに、UGという一括りの名称のもとで研究されてきたものであるが、現在のミニマリストにおいては、両者を区別することで、本来のUG（第1要因）を明らかにする試みであるとも言える。Al-Mutairi（2014）は、この変化をgenetic naturalismからnon-genetic naturalismへの変化と捉えている。

このようなミニマムなUG、並びに自然法則などの関与へのシフトについて、Smith and Allot（2016: 127）は次のように述べている。

言語機能の進化論への冒険の意外な結論は、特に言語の原理は言語学の領域においても、また言語学があきらかにしてくれることを我々が期待するかもしれない「人間の知性の特定の特徴」においても、果たす役割はかなり小さいかもしれないということである。代わりに、人間の言語機能と人間の思考の特性の多くが認知システムと自然の法則の一般的な特性により決定されていることが判明するかもしれない。（Smith and Allot（2016: 127）訳 150頁）

このような生成文法の進展は、Chomsky 単独で行えたわけではなく、多くの生成文法学者の研究が重要であり、その意味においては、Generative Enterprise は、協働的な研究パラダイムであるのは間違いない。しかしながら、この文法理論の進展を決定的にしてきたのは Chomsky の突出した知性であることも否定できない。Chomsky は、科学としての言語学の必要性や確立の志から、自らの提案を、いかに長い間採用されてきたものであっても、否定して、新しい理論に向かう科学者としての姿勢を保持しつづけている³⁾。

Chomsky has several times overthrown the system he developed, confusing many, alienating some, inspiring a few. In each case his motivation is to deepen understanding, even if that means an apparent sacrifice of previous insights. (Smith and Allot (2016: 101))

ここで、第3要因について触れておこう。先述のように、現在のミニマリストはこの第3要因がどのように文構造の組み立てに関わっているのかを解明する方向に向かっている。しかしながら、第3要因が自然法則として物理的に働くものであるとすれば、果たして、言語や文の構造といった脳の中で作り出される表象 (representation) のレベルでも同様に働くと考えていいものだろうかという疑問が生じる。Jackendoff (2012) の言葉を借りて言うならば、「認知的視点」からの研究に「神経的視点」の研究が入り込んでいるということになる⁴⁾。つまり。脳=心のメカニズムとモノのメカニズムを同等に扱ってよいのかという問題である。ココロとモノは別物であると主張したのが17世紀フランスに生きその後の合理主義哲学に先鞭をつけたデカルト (René Descartes) で、心と身体は別々に扱われなければならないとする二元論を主張した。それに対し、Chomsky は両者を同等に扱うべきであるとする方法論的自然主義 (methodological naturalism) の立場を採っている。ここには、Chomsky の哲学上の独自の解釈が関係するのだが、その議論は心の哲学に及び、論者のような凡人には議論の細部に立ち入ることが残念ながらできない。Minimalist の方法論を論じている Al-Mutairi (2014) は、ココロとモノを同等に扱えるとする Chomsky の考えは、信念と楽観主義に基づいたものであり、現在の科学水準ではそれが正しいのかどうか判断できないものであると述べている。つまるところ、信念・信条の問題に行き着くこととなる。そうなると、宗教における信仰と同じく、正しいか正しくないのかの問題ではなく、それを信じるかどうかの問題となる。科学者は強い信念を持つことが重要であると Chomsky は考えていることは次のコメントからも明らかである。(1988年, UCLA で学生への質問に答えて(酒井 (2004 : 68))

もし、あなたが孤立して、世の中の誰とも全く違っているとしたら、自分の気が変になったか、どうかしたに違いないと思いはじめましょう。あなたが他の人々と何か違ったことを言っているという事実に負けないためには、強い自我が必要です。

どの科学、学問にせよ、その土台には哲学=視点があることから、この「信条」の問題は避けら

れないのは当然である。重要なのは、この点を踏まえた上で、第3要因を用いた研究を進める価値があるという強い自覚が、研究者には必要となる。

4. 生成文法の持続可能性

以上、見てきたように、生成文法はUGの存在を絶えず意識しながら理論を展開してきた。現在のミニマリストでは、言語の構成を3つの要因に分けて、進化論的視点を考慮し、ヒトの遺伝的特質としてのUGを極力最小のものに押さえ、言語に特化されない諸原理や法則などから普遍性に迫る研究アプローチを採っている。このような戦略をかかげる生成文法が持続可能であるためにはどのような方法があるだろうかについて考えてみたい。

論者が考えるところ、生成文法には進む道としては次の3つがあるかと思われる。

- (A) 理論の実証的研究（＝領域横断的な協働）
- (B) 独自の理論研究：言語知識の生物学的基盤の提案
- (C) 第3のアプローチ：言語事実の整合性を重視する研究

これらの3つについてそれぞれを見ていこう。

(A)の「理論の実証的研究」は、ミニマリストで提案・採用されている仮説を脳科学のなかで検証を行っておくという手法である。2021年の日本言語学会の公開シンポジウムでもこの可能性の追求がトピックになっている。現在のミニマリストが生物言語学(biolinguistics)の中では非主流で、交わりを重視しない傾向があると藤田らは指摘する⁵⁾。第3要因の研究は2010年代から継続しているが、以前、この第3要因についてははっきりしたものを特定化できているわけではない。2014年の藤田(2014: 862-64)の指摘は現在のミニマリストにもあてはまる。

現状では、生成文法における第三要因は漠然とした構想のままであって、検証可能な具体的提案となるには至っていない。過去の研究から明らかになった言語の極小性や局所性、最小演繹などの特性を、最小作用の原理など、より一般的な自然法則の例と考えることができるというだけである。

そのため、第3要因として提案されている仮説を脳科学で検証することが、ミニマリスト主義が生物言語学から正当に評価されるためには不可欠である。このような見地からbiolinguisticsへの実質的な貢献ができるようなアプローチに近づけるとするのが1つ目の可能性である。ただ、現段階においては、このアプローチを採るには多くの課題が残されているという現実がある。

2つ目の可能性(B)は、生物言語学の動向とは関係なしに、独自に理論を開発していく可能性であり、これは現在の最先端のミニマリスト研究者が取り組んでいる方法である。1つ目のアプローチとは矛盾するが、ひとつの学問領域が成立する前提に他の分野・領域からの支持を受け

なければならないということはない。これまで、生成文法が取り組んできたように、経済性や簡素性などの基準に沿いながら研究を進展させていくこと自体には問題はない。Al-Mutairi (2014: 174) は次のように述べている。

Indeed, the scientific merit of any discipline should be based not on its public relations with other disciplines, but rather on its own results which, while they may not be somehow legitimized by results from other disciplines, may nevertheless be found satisfactory at a certain level of understanding.

「実際、いかなる学問分野の科学的メリットも、他の学問分野との関係に基づくのではなく、むしろ他の学問分野によって何らかの形で正当化されないかもしれないが、一定のレベルの理解において、満足のいくものであると認められるその分野独自の結果に基づくべきである。」

一方で、このアプローチが冒頭で述べた現在の状況を生み出していることから、他の領域への目配りをしつつ、その研究を進める必要があるだろう。

3つ目の可能性(C)は、生成文法において発掘された言語事実を重視する研究である。つまり、これまで生成文法が蓄積してきたデータや知見を利用しながら、言語事実との整合性を重視する仮説を積み重ねながら、モデル構築を推進していく方向である。この考え方を採る小川ら(2020: 208)は、生物言語学とは一線を画した生成文法の例として次のような研究を挙げている。

- (2)
- ・事象構造・語彙概念構造の精緻化に基づく「構文」の研究
 - ・分散形態論
 - ・カートグラフィー研究(普遍的機能範疇階層の提案)
 - ・マイクロ・パラメータ統語論 etc.

どれも、これまでの生成文法の理論進展のなかで、提唱されてきたアプローチである。これらは生物言語学に舵を切った主流派ミニマリスト(先述のように舵を切ったと言えども言語進化研究の本流からは乖離している現状があるが)から、切り離されてしまう恐れがある。つまり、これらは開発された当時の生成文法理論の枠組みに則ったものなので、生成文法の理論的進展から、切り離されてしまった(あるいは取り残されてしまった)ように映る研究である。しかしながら、Chomskyが繰り返し強調してきたように、Minimalistは理論モデルではなく、研究戦略の一方向の提唱であることを我々は念頭に置いておく必要がある。Strong Minimalist Thesisにしても、反証可能性の高い作業仮説であり、うまくいくようにするためにはどう考えたらよいかの指針を与えるものである。確かにミニマリストは斬新な言語の捉え方を我々に提供するものであるが、見落とされる(捨象される)部分も大きくなっている。これはGB理論でもそうであるが、小川らが挙げた研究は、急進的な理論展開が捨象する部分との関連を繋ごうとする試みである。一見、

最先端の理論から離脱した（よって時代遅れの）研究のように見える可能性があるかもしれないが、このような言語現象を大切に言語理解を深めていく研究者は何にためらう必要もない⁶⁾。

さらに、小川らが挙げたもの以外にも、発展の可能性のあるアプローチに、Norvin Richards (2016)の研究がある。それまでsyntaxの形式面だけから分析されてきた特性を音韻論と統語論の両方が関わるということを明らかにしようとした研究である。これはJackendoff (2002)で指摘されている「主流派生成文法の統語論中心主義 (syntacto-centrism)」からの脱却と捉えることができる。

ここで、本稿の残りの紙面を用いてこの3番目のアプローチに属すると論者が考える研究の一端を紹介することにしよう。それは視点の異なるアプローチとの協働である。具体的に言えば、構文文法・認知言語学との協働である。

生成文法と構文文法を含む認知言語学には大きな理論的隔たりがあるのは周知の通りである⁷⁾。生成文法がこの70年の間に多くの知見をもたらしてきたように、40年にわたる認知言語学も多くの成果を積み重ねてきたことは明らかである。

両者は土台となる哲学(=視点)が全く異なるものであるのは確かであるが、接点が全くないわけでもない。共に具体的な言語現象を扱うわけであるから、土台やモノの見方の違いはとりあえず棚上げにしておいて、対象となる言語現象を両者の知見を組み合わせることで、さらに見えてくるものがあるのではないだろうか。つまり、イデオロギーを大上段に構えて相手の積み重ねてきた成果を無視するのではなく、一旦、イデオロギーの問題を棚上げし、(同一の)言語現象を見ていくことにより、新たな知見を得るために歩み寄るという研究態度である。ここでは、それにあたるかどうかさらに詰める必要があるが、具体的なひとつの現象を見てみよう。

取り上げる具体的な現象は日本語における数量詞遊離現象である。関係分野の研究者にはよく知られているように、日本語には次のような数量詞が連結する名詞句の外に置かれる場合がある。

- (3) a. 学生が3人本を買った。 (cf. 3人の学生が本を買った。)
b. *学生が本を3人買った。

このような性質に統語的な分析を試みたのがMiyagawa (1989)の「相互C-コマンド条件」と呼ばれるものである。この条件については、発表された直後から、(4)に挙げるような様々な反例が指摘された。

- (4) a. 子供がおもちゃをもう2つ壊した。 (結果性)
b. *菜穂子は親友をそれでも二人信じた。
c. 公園を真っ直ぐ3つ横切って駅前に出た。 (完結性)
d. ?公園をゆっくり2つ散歩した。
e. 学生が図書館で5人勉強していた。 (時間的制限性)
f. ??学生が図書館で30人勉強した。

- g. テスト前にもかかわらず本館が改装中だったので、昨日は閉館まぎわまで、
学生が図書館分室で30人勉強した(らしい)。
- h. [?]学生が次々と本を5人買った。(反復性)
- i. 学生はレポートを3人提出した。(計数性)
- j. 学生はレポートを3人だけ提出した。

このような相互Cコマンド条件の反例に対し、熊代(2019:144)は認知言語学の立場から次のような説明を与えている。

数量詞の遊離に関連する、結果性、完結性、時間的制限性、反復性、そして計数性という一連の制約は、すべて複製可能性を決定するための要因なのである。

ここでいう「複製可能性(multiplicability)」とは動詞の表すプロセスを複製できるかどうかということである。この条件では、(3)のような数量詞遊離構文のコアケースを説明できないので、コアケースについて、熊代は参照点構文の点から説明できるとしている。

参照点構文

存在が表される名詞句とそれを修飾する数量詞がともに参照点内に存在していなければならない。

さらに、複製可能性も参照点も、共に統語的なものでなく、意味的なものにあたるので、熊代(2019:144)は次のようにまとめている。

認知文法による分析では、関連する制約をすべて意味という単一の領域で説明することが可能であり、それに加えて、個々の制約を総合的に説明することも可能である。

つまり、「意味」という一つのレベルだけでコアケースもMiyagawa(1989)の反例も説明できるので、より優れていると熊代は論じている。

複製可能性だけで例外を十分に説明できるかどうかはさらなる研究が必要であると思われるが、ここでは、熊代の分析方法についてコメントをしておきたい。

まずは、熊代が、複製可能性を導く土台としてMiyagawaのCコマンド条件の反例を利用している点である。学問研究は先行研究があってこそ進展していくものであるので、それ自体は問題はないし、その点を批判するつもりはない。そこを押さえた上で言えば、(4)のような先行研究のデータなしで、熊代が論じるような説明に到達できたかどうかという点にある。特に、認知言語学はカテゴリーの揺れや連続性を認める理論であるが、そのような言語観を持つ理論は、基準自体がプロトタイプの性質を帯びることになるので、基準として参照点構文を打ち出すことがで

きたとしても、参照点構文で説明できないデータ（つまり、Miyagawaの反例）を取り出すことができたであろうかというところに疑問が生じる。先に見たような反例が発掘された裏には、生成文法の持つ反証可能性があったからこそではないだろうか。さらに言うならば、「意味」という捉えにくい基準ではなく、「形式（＝構造）」が言語学的に有意義な一般化を取り出す足掛かりになることを押えておく必要があるのではないだろうか⁸⁾。

しかしながら、このコメント自体はここでは重要でない。重要なのは、認知言語学と生成文法の協働の可能性を論じることがここでの目的であるので、そこに話を戻すことにしよう。

ここで、まず、カートグラフィー分析を用いた論者の数量詞遊離の研究を紹介したい。

赤楚（2019）は、指摘されたMiyagawaへの反例のなかにいくつかを再検討することで、それらに共通してみられる構造をあぶりだしている。

- (5) a. 学生がレポートを3人だけ提出した。
- b. 水着姿の女性が楽しそうに5人泳いでいた。
- c. 昨日は閉館まぎわまで、学生が図書館分室で30人勉強したらしい。

まずは、これらが相互Cコマンド条件に反していることを確認されたい。これらを指摘した先行研究では、それぞれ「取り立て詞の付加」「進行相（ている）の付加」そして「時間的限定性」という観点から論じられていたものである。さらに、石川（2016）は次のように「のだ」が付加されると容認性が高まることを指摘している。

- (6) a. 水着姿の女性がアイスクリームを5人食べたのだ。
- b. 大学生がジャズダンスを5人踊ったのだ。

ここで、(5c)について触れておきたい。この文は三原が「時間的限定性」として指摘したものであり、確かにその意味において例外が成立していることから、何らかの関係があることは否めないのは確かである。がその一方で、赤楚が着目したのが文末の「らしい」（伝聞表現）である。つまりこの例文は、時間的制限性とともこの文末詞の存在が容認性に関与しているものと考えられる。

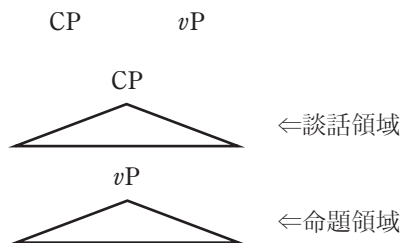
以上確認したように、それぞれの反例に関してはそれぞれの観点から説明（と言えるかどうかは別にしておいて）がなされてきたが、これらの反例を統語論的に見ると、ある共通点が浮かび上がってくる。(5a)の「取り立て詞の付加」であるが、取り立て詞の認可はFocus Phraseが関与するとカートグラフ研究では考えられている。(5b)における「ている」は、「進行相」という表すことは確かであるが、「ている」にはもう1つアスペクトとは別の意味を示す機能がある。それは「眼前の事態の報告」である。話し手が直接体験として目の前で起きている事態を報告する際に「ている」が用いられる場合がある。これは、言語学的に言うところの「証拠性」表現にあたりと考えられる。(5c)については、先行研究では「時間的限定性条件」からの説明であっ

たが、先に触れたように、「らしい」の付加が容認性には必要であると考えられることから、この「らしい」に着目すると、「伝聞」という「証拠性」表現が関与していることになる。また、(6)における「のだ」はFocus表現のひとつと考えると、ここもFocus Phraseが関係していることになる。これらの考察をまとめると次のようになる。

- (7) a. 取り立て詞 ⇒ Focus ⇒ Focus Phrase
 b. 進行相 ⇒ 証拠性 ⇒ Evidential Phrase
 c. らしい ⇒ 証拠性 ⇒ Evidential Phrase
 d. のだ ⇒ Focus ⇒ Focus Phrase

ここに現れるFocusや証拠性はカートグラフィーで分類されCP領域にあるものである。カートグラフ研究では下の図が示すように文は談話領域と命題領域の二つに分けられる。

- (8) 文＝談話領域＋命題領域



上で見た相互Cコマンド条件の反例はどれも談話領域の主要部が関与していることになることから、(9)のような一般化を引き出せることになる。

- (9) 日本語の数量詞遊離現象において、文がCPを明示的に利用している時には、相互Cコマンド条件を違反しているものも容認可能となる。

ここまでの観察と考察が正しいのであれば、次のステップは、この一般化はどこから来るのかというところに向かうことになる。その際、熊代が分析する「複製可能性」がさらなる考察の手掛りとなるかもしれない。

残念ながら、これ以上の議論はここではできないため、今後の研究に委ねることにするが、ここで確認したかったことは、2つの異なるアプローチは切磋琢磨しながらも、お互いの研究成果を利用しながら、言語現象の解明に進める可能性があるのではないかという視点である。

5. まとめ

本論では、生成文法が今後採るべき道について考察を行ってきた。universal grammarを軸に

理論を進展させてきた生成文法は、2000年代に入り、進化論的視点を取り入れることで、UGを説明項ではなく、被説明項として捉え、その説明のために遺伝的な要因としてのUGを最小限のmergeに落とし込むまでになる。同時に、これまでUGとして遺伝的特質として研究対象としてきた、自然法則などの物理的法則を第3要因と位置づけて区別し、現在はこの第3要因が文の組み立てにどのような働きをしているのかを明らかにする研究が行われている。このような状況のなかで、かつての「魅力」が失われてきているとすれば、どのような形で、生成文法の研究は続けられていくのかについて考え、3つの可能性があることを指摘した。(A) 理論の実証的研究、(B) 言語知識の生物学・物理学的基盤の理論的提案、(C) 言語事実および生成文法が蓄積してきた知見を取り込みながら仮説や補助仮説の提案・修正を行い、記述的な理論を目指す。論者はこの3番目のアプローチのなかに、生成文法が認知言語学などの別の言語理論と協働する可能性があることを論じた。いずれにせよ、若い多くの研究者を惹きつける魅力をどのアプローチも必要としているのは間違いない。

* 本稿は、2023年2月「同志社ことばの会」で発表した内容に手を加え改訂したものである。当日貴重なコメントを頂いた山内信幸氏（同志社大学）と菊田千春氏（同志社大学）、並びに原稿を読んでコメント頂いた須川精致氏（名古屋学院大学）に感謝する。

注

- 1) 日本言語学会161回大会のシンポジウム（「理論言語学を科学哲学する：生成文法、形式意味論、認知言語学の未来」）は、山泉実氏によって企画されたもので、成田広樹氏、窪田悠介氏、田中太一氏、太田陽氏が発表を行っている。また、生成文法とbiolinguisticsに関して、藤田らは、遊佐（2018:105）において、次のように述べている。このように生物言語学の最先端では生成文法離れ・言語学離れが急速に起きており、どの特定の理論言語学的枠組みにも拘泥しない学際研究の必要性が叫ばれ、実際に展開されつつある。
- 2) Christine Kenneally (2007: 62) の *The First Word* による。聴衆のなかには Ray Jackendoff, Daniel Dennett という面々もいたと Steven Pinker は述べている。
- 3) このような姿勢に関しては、次のような若き日の Chomsky (1977: 177-8) のコメントにも、氏の飽くなき科学的探究心が現れている。

Anybody who teaches at age fifty what he was teaching at age twenty-five had better find another profession. If in twenty-five years nothing has happened which proves to you that your ideas were wrong, it means that you are not in a living field, or perhaps are part of a religious sect.

- 4) Jackendoff (2012: 15) を参照のこと。
- 5) 遊佐編 (2018: 201) による。
- 6) Chomsky (2012: 277) において聞き手である James McGivray が付けた解説のなかにある「UG+」も、この3番目のアプローチに入るものと思われる。
- 7) 両者における言語観やそれぞれの持つ問題点については赤楚 (2023) で触れられてある。
- 8) 赤楚 (2005: 61 脚注3) は、次のように述べている。

確かに Miyagawa のアプローチでは説明できないものであり、さらなる研究が必要であることを示している。同時に、これまでの研究から、日本語の数量詞遊離現象は、音韻論から語用論に至る、さまざま

なレベルで、それぞれの制約が働いており、1つのレベルの制約だけで、この現象の生起分布を捉えることはできないと結論づけるのが妥当なことがわかる。しかしながら、確かに反例は存在するものの、Miyagawaのアプローチも説明できうる範囲があり、反例があるからという理由で、破棄するのではなく、どの程度（或いは範囲）まで有効であるのかを探る方向もある。生成文法の明示的な構造提示と予測力がこの現象に関するさらなる理解を与えてくれる可能性があるし、そのような努力を通して複雑な要因が絡む文法・言語現象が解明されてゆくものと思われる。

参考文献

- 赤楚治之 (2005) 「日本語における概数数量詞の Q-float について」『日本語文法』5 巻 2 号 57-73。
- 赤楚治之 (2019) 「日本語の数量詞遊離文一判断の揺れはなぜ起きるのか—」『ことばの対話—理論・記述・言語教育—』69-78 頁。英宝社。
- 赤楚治之 (2023) 「構文文法と生成文法—*that*-trace 効果を巡って」『名古屋学院大学論集 (言語・文化篇)』34 巻 2 号 1-20。
- Al-Mutairi, F. R. (2014) *The Minimalist Program: The Nature and Plausibility of Chomsky's Biolinguistics*. Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures*. Foris Publications.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Chomsky, N. (2004) "Beyond explanatory adequacy." ed. by A. Belletti. *Structures and Beyond*. Oxford University Press. 104-131.
- Chomsky, N. (2012) *The Science of Language: Interviews with James McGilvray*. Cambridge University Press.
- Culicovet, P. W. and P. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*. Oxford University Press.
- Goldberg, A. (2006) *Constructions at Work*. Oxford University Press.
- 藤田耕司 (2014) 「生成文法と複雑系言語進化」『計測と制御』第 53 巻第 9 号, 862-864 頁。
- 原口・中村・金子 (2016) 『チョムスキー理論辞典』研究社。
- Ibbotson, P. and M. Tomasello (2016) "Evidence Rebutts Chomsky's Theory of Language Learning" *Scientific American* September 2016 (翻訳記事『日経サイエンス』(2017年5月)「チョムスキーを超えて: 普遍文法は存在しない」)
- Jackendoff, R. (2002) *Foundations of Language*. Oxford University Press.
- Jackendoff, R. (2012) *A User's Guide to Thought and Meaning*. Oxford University Press.
- Kenneally, C. (2007) *The First Word*, Penguin Books.
- 熊代敏行 (2019) 「認知文法の手法」『認知言語学大事典』131-14 頁。
- 町田・他 (2022) 『認知統語論』くろしお出版。
- 三原健一 (2022) 『日本語構文大全 第 2 巻 (提示機能から見る文法)』くろしお出版。
- Miyagawa, S. (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. Academic Press.
- Newmeyer, F. (1980, 1986^{2nd}) *Linguistic Theory in America*. Academic Press.
- 酒井邦嘉 (2006) 『科学者という仕事』中公新書。
- 西村・野矢 (2013) 『言語学の教室: 哲学者と学ぶ認知言語学』中央公論。
- 小川・石崎・青木 (2020) 『文法化・語彙化・構文化』開拓社。
- Pinker & Bloom (1990) "Natural language and Natural Selection," *Behavioral and Brain Sciences* 13: 707-84.

生成文法の持続可能性について

Richards, N. (2016) *Contiguity Theory*. MIT Press.

Smith, N. and N. Allott (2016^{3rd}) *Chomsky Ideas and Ideals* Cambridge University Press. (今井他訳 (2019年) 『チョムスキーの言語理論』新曜社)。

Ross, J. R. (1967) *Constraints on Variables in Syntax*. MIT dissertation. (= *Infinite Syntax!* (1986))

辻・編 (2019) 『認知言語学大事典』朝倉書店。

遊佐典昭・編 (2018) 『言語の獲得・進化・変化』開拓社。

山梨正明 (2021) 『言語学と科学革命—認知言語学への展開』ひつじ書房。